

# आयुस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足 80

## 絵本の力

図書館長・教授 照屋敏勝

私が「絵本ノート」という課題を出すようになってから20余年になる。「絵本ノート」は「保育内容 言葉」という科目の課題であり、8ヶ月間の長期課題になっている。

その課題内容は次のようなものである。

1. 絵本 45冊
2. 児童文学作品 6冊
3. 保育に関する本 1冊
4. 障害者に関する本 1冊

(中村久子『こころの手足』)

5. 平和に関する本 1冊

『わたしがちいさかったときに』

(長田 新編『原爆の子』より)

以上54冊のすべての作品を読んで、1冊のノートに作品ごとの感想文を書いて、完成させて提出する課題である。

この課題のねらいは7つある。

1つは、絵本世界の体験である。4～5冊ではなく数十冊も読めば絵本の世界が分かるようになる。

2つは、絵本に対する感性や感覚、絵本を感じる力、絵本を分析する力、などである。1冊1冊と深くかかわるので、次第にそういう力がついてくる。

3つは、イメージトレーニングや想像力である。絵本は絵と少ない文で構成されている。したがって、その場面を理解するためには必然的に読み手の想像力が要求される。

4つは、表現力である。「絵本ノート」はすべ

て絵と文で表現されている。絵は必要条件ではないが、苦手な人もみんな描いている。つまり、学生たちの言語的表現力と造形的表現力が育つことになる。

5つは、好きな絵本や好きな絵本作家の発見である。好きな絵本作家がみつかったら、その作家のすべての作品を読むことが大切である。

6つは、絵本や児童文学や障害者の自伝などを通して子どもや人間に対する認識を深めることである。

7つは、これらの読書や思索を通して自己を再発見し、再認識することである。とくに『こころの手足』はほとんどの学生にとって衝撃的である。

「絵本ノート」の課題をこなしていく中で、学生が感じとり、学ぶことができたものは多様である。「まず、絵本に対する見方が変わったということである。今までは、絵本は小さい子どもが読むための本としか思っていなかった。……しかし、実際には、あの短い絵本の中には、本当にたくさんのがつまっていたと思う。思いやり、家族の大切さ、協力、人を愛することのすばらしさなど、私達が人間として生きていく上で、大切なことばかりがつまっていたように思う」——と一人の学生は述べている。しかし、これは多くの学生の感想であり、認識である。

「絵本は、子どもに生きている喜びを感じさせ、生きる力を与えます。同時に大人をも生きかえらせてくれる言葉の泉です」(絵本研究者：松居 直)

## 本の世界

講師 石野 美也子 (社会福祉)

私の本の思い出と言ってみず頭に浮かぶのが「フランダースの犬」です。難しいことは字も読めないほど小さかった私には考えられたはずもないのですが、おじいさんのネロに対する愛情や、申し訳ないと思っている気持ちが妙に寂しく、切なかったのです。もちろん切ないなどと理解したのではないのですが、胸がキュッとなった感覚は不思議と今も忘れられません。また、ネロとパトラッシュが最後に手を取り合うように亡くなるころでは声も出ないくらい大泣きするのです。それを毎日繰り返しても、「本を読んであげる」といわれてはまた「フランダースの犬」を持って行き、あまりに泣くので家族に「たまには違うのを読んであげる」といわれても私はその本が大好きで、絶対に離さなかったのを覚えています。寂しくて、悲しくて、切ないのだけど、それが何ともいえない気持ちになったものです。大人になって考えるとそれが「心を打つ」ということだったのではないかと思います。こうして私に本の世界でいろいろとイメージし、感動することを教えてくれたのが「フランダースの犬」という一冊の絵本との出会いでした。

それからは「アルプスの少女ハイジ」を読んでは、ハイジがおじいさんのところに帰って山小屋から見る星空を、自分も一緒に見ているような気持ちになって何度も読み返し、あんな干し草のベッドで寝てみたいと思ったり、特に大好きだった「小公女」では寄宿舎にいるセーラがお誕生日にお父さんから贈られた豪華な人形が持つかごの中の一つひとつ（そのお人形は大きくて、かごの中の小物も本物が入っている、その描写は今思い出してもわくわくします。）を想像して楽しくなったり、突然、境遇が変わって、食べるものもろくに食べられず、こき使われても「小公女」としての凜とした気品と優しさを失わない姿に感動したり、どうなっていくのかドキドキしたものです。小さい頃の私には、毎月1冊ポプラ社の本が届くのが楽しみでした。

小学校4、5年になると島崎藤村や夏目漱石、シェークスピアを読むようになりました。兄とは

13歳年が離れているので、私の周りには同世代よりは、少し大人のおいのする本があり、今ほどテレビも面白くなく、もちろんゲームもなく、本は自分を違う世界に連れて行ってくれる、唯一のものだったのです。そういう意味ではバーチャルなのですが、小さい頃大好きだった絵本をアニメで見ても同じように感動しないのは、想像する部分も映像で見せてくれるからではないかと思えます。そういう私も今はテレビが大好きで、本の世界へ迷い込むことも少なくなりました。しかし、本はその時々思い出や自分の成長とつながり、楽しいものです。

初めて長編をハードカバーで読んだ時の気持ちは忘れられません。その本は私の13歳の誕生日に兄からプレゼントされた集英社の上・下巻になった「風と共に去りぬ」でした。主人公のスカレットはわがままで気位が高いけれど、口紅がないときに自分の唇をかみしめ色を出す勝ち気な仕草や、時には人を傷つけることもあるけれど、自分の気持ちに素直なところ、何より有名な台詞「明日、夕方で考えよう」というラストシーンはやはり心に残ります。でも、私はスカレットよりは優しいメラニーに惹かれ、なにより原作者のマーガレット・ミッチェルにあこがれました。女流作家であり生涯にたったひとつ残したのが「風と共に去りぬ」です。何故、その本を贈ってくれたのか、遠い昔で兄は忘れていていると思いますが、私は歌にもあるように、大人の階段をのぼった気がしました。

高校時代には、誰もが一度は通るという太宰治の世界に浸り、人間とは弱いものだけど、その弱さを自分の中に認めることのできる太宰に何故か惹かれたものです。この原稿を書きながら、読書などしばらくしてないなあ、最近本を読んで泣くほど感動したのはいつだったろうと思うと、本の世界がなんだか懐かしく思えてきました。

月もまあるくなってきたので、お団子を食べながら、また本の世界に迷い込むのもいいかなと思っています。少し大きめの活字で…

## 私のすすめる3冊

学長・教授 伊藤唯真 (民俗学・仏教学)

### 1. 『法然の手紙 愛といたわりの言葉』

いしまるあきこ 石丸晶子 編訳／人文書院

法然上人のすべての手紙18通と、門弟にのこされたことば9篇をできるかぎり易しい現代語に訳されたもの。法然の人となりの広やかさと知性、また信仰の深さと強さが伝わってくる。

### 2. 『葉っぱのフレディー—いのちの旅—』

レオ・バスカーリア 作・みらみなな 訳・島田光雄 画／童話屋

アメリカの哲学者が書いた、生涯でただ1冊の絵本。死の悲しみに直面した子どもたちと、死について適確に答えられない大人のために、いのちの循環を考えさせてくる。児童教育を学ぶものにぜひ薦めたい。

### 3. 『女はなぜ土俵にあげられないのか』

うちだてまきこ 内館牧子 著／幻冬舎

相撲は古代の神事から格闘技、そして「国技」へ1350余年生き続けてきた伝統の「わざ」。日本人の精神性が凝縮されている。女性を排除してきたわけを相撲愛好家の人気脚本家のがのべる。

## 自己の真価

同じく風雨にさらされども

柿は甘く

柚は酸く

唐辛は辛し。

人々同じく風雨にさらされども

甘き人あり

酸き人あり

辛き人あり。

いずれの人が仕合せなるか

我知らねども

与えられたる運命より

我は出来るだけ滋味をとりて

自己の真価を生かしたしと思うなり。

『武者小路実篤詩集』(角川書店)より

※武者小路実篤(一八八五—一九七六)

小説家、劇作家。小説「友情」「真理先生」、戯曲「その妹」「ある青年の夢」などの代表作、その他多くの人生論を著し、一貫して人生の賛美、人間愛を語っています。実篤の詩は日記をつけるかのように率直に自由に書き続けられ、その数は二千を越えます。昭和二十六年に文化勲章受章。

## 『子どもと歩く 子どもと生きる』を読んで

児童教育学科初等教育専攻2回生 井上 加央里

「教師になりたいな。」

この本を読んで私の気持ちが確信へと変わった。

私は今まで、教師という仕事を甘く考えていた。毎日子どもたちと楽しく過ごしながら様々なことを教科書を用いて教えていくくらいにしか思っていなかった。6月に二週間、小学校で実習をしたが、毎日子ども達はたくさんの笑顔を見せてくれ、時間が経つのがとても早く感じた。休み時間は共に汗を流し楽しみ、授業中は机間巡視をし補助をした。

「ああ。なんやあ、やっと分かった。」

と、子どもに言葉がけをしている時に、嬉しそうな顔で言ってくれたのを今でも覚えている。私の一言で次の問題への意欲を高めてくれた。二週間は私にとって忘れることのできない貴重な経験になったし、新たな自分への課題に気付くことができた。

しかし、学校という世界は私が思っている程甘くはなかった。現代は技術も進歩し、住み良い環境となり、小学校へ通うのが当たり前だと誰もが思っているが、そうでない世界を初めて知った。平野婦美子さんや近藤益雄さんの生きた時代には貧富の差があり、学校で教えるだけでなく、本を揃えたり、子どもの身の回りのことまでも補助をする必要があった。また、教室という空間に縛りつけて勉強をするのではなく、一人ひとりに合った勉強法を考えながら教えていた。考えてみれば今の学校のように教卓と机や椅子が無くても勉強はできる。教師は教壇に立って子どもを支配し、全員に同じことをさせなくてもいいと思えてきた。全員一緒に進めても、中には他の子よりも遅い又は早い子が出てきて一人で授業を展開するのが困難となる。まして現代の子どもは進学するためやいい成績をとるために塾に通う子もいれば、家庭教師に教えてもらっている子、通信教育で勉強をしている子もいる。自ら勉強したくて塾などに通っている子も中にはいると思うが、大半は親

に無理矢理通わされている子もいると思う。平野さんの頃と違い、勉強が強制されていることに気が付いた。問題が解ける喜びや言葉が増えていく楽しみをもっと感じられるような授業ができるように我々教師はしなければならぬと思うし、一人ひとりと関わって、それぞれに合わせて教えるように心掛けなければいけない。

私はこの本に出会わなければ、軽い気持ちのまま教師になろうとしていた。平野さんや近藤さんのされてきたように世間体を気にせず子どもの事を一番に考え、何事にも積極的に納得がいくまで取り組もうと思ったし、他の教師という職に就いている人みんなも教師とはどのようなものであるか改めて真剣に考えてほしいと思った。実習先のように全部の小学校がいいとは限らない。私と同じ考えの人もいれば違う人もいる。その中で自分は子ども達のために何が出来るか考え、積極的に一生懸命、一途に取り組まなくてはならない。従わせて授業をするのは容易なことかもしれないが、私は一人でも多くの子どもに勉強して楽しいなと思ってもらえるような教師になりたい。貧富の差や学力の差があり戸惑うこともあるかもしれない。でもそんな時には同じ夢をもっている友人に相談したり、いろいろ試してみたりと経験を重ねていこうと思う。まだまだ教師になるために勉強することはあるし、学校で働き始めたら毎日が勉強だと思うが、子どものことを一番に考え、一つ一つ乗り越えていき、自分の子どものように多くの愛情を注げる教師になろうと思っている。

『子どもと歩く 子どもと生きる』

岡村遼司 著 (駒草出版)

